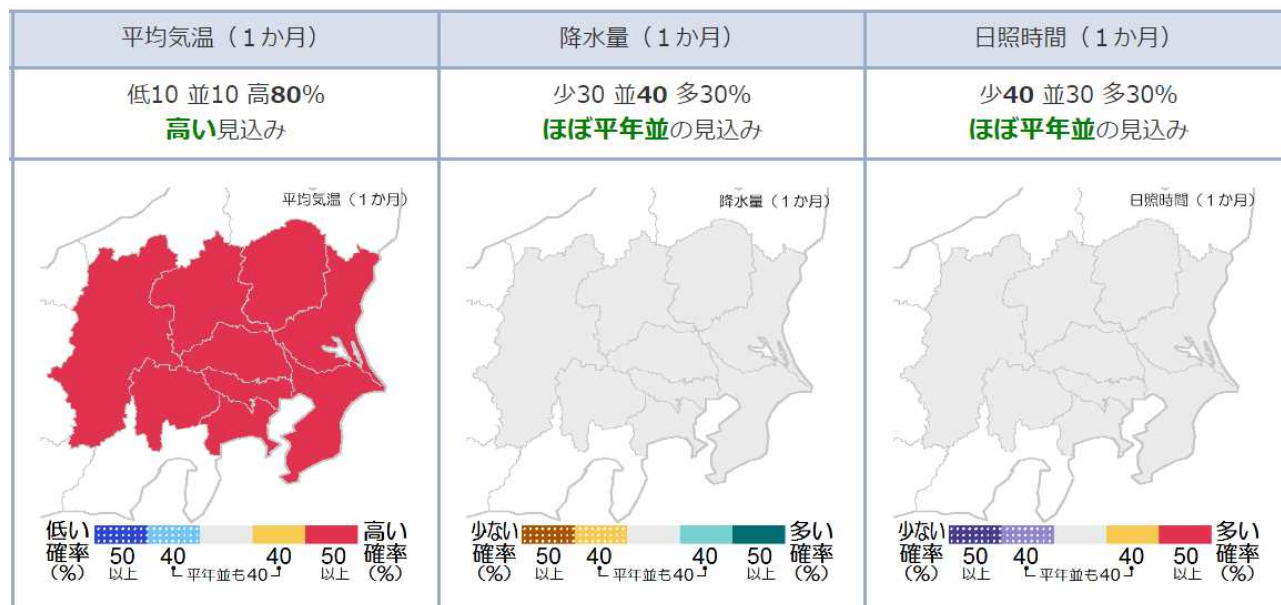


梅雨期における農作物の技術対策

令和6年6月24日
農業技術課

気象庁は、6月21日「関東甲信地方が梅雨入りしたと見られる。」と発表しました。例年より14日遅い梅雨入りですが、病害の発生や管理作業への影響が心配されますので、今後の気象情報等に注意し、農作物の管理を徹底して下さい。

1 気象庁1ヶ月予報



2 農作物の技術対策

(1) 果 樹

<共 通>

- ・降雨により病害の発生が心配されるため、週間天気予報を確認し、防除間隔が空かないよう、慣行防除を徹底する。
- ・散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を延期せず、降雨前に散布する。
- ・連続的な降雨や強い雨が降った場合は、薬剤の残効が低下しやすいので、散布間隔を短くする。
- ・雨の晴れ間に薬剤散布する場合、葉が濡れているときは、SSの送風ファンなどで露を払ってから散布を行う。

<ブドウ>

- ・黒とう病やべと病の発生が見られる部位（葉、新梢、果房等）は伝染源となるため見つけ次第、取り除く。
- ・黒とう病やべと病の発生が見られる園または、発生が心配される園では、使用回数や収穫前日数に注意して、次の薬剤を散布する。

①黒とう病には、フルーツセイバー1，500倍（使用回数3回、収穫7日前ま

で) または、オンリーワンフロアブル 2, 000 倍 (使用回数 3 回、収穫前日まで) を散布する。

②ベと病には、ジャストフィットフロアブル 5, 000 倍 (使用回数 3 回、収穫 30 日前まで) を散布する。

③その後は防除暦に従い、定期的にボルドー液を散布する。

- ・晩腐病の発生を防ぐため、防除暦や晩腐病防除マニュアルを参考に防除を徹底する。カサかけや袋かけが遅れる場合は、セイビアーフロアブル 20 2, 000 倍 (使用回数 3 回 収穫 21 日前まで) を散布する。
- ・晩腐病、黒とう病対策として仕上げのカサかけ、袋かけは出来るだけ早く行う。摘粒作業が遅れている場合は、先にカサをかけてから摘粒を行う。
- ・新梢管理を行い、棚面を明るくし風通しを良くする。

<モモ>

- ・果実腐敗病の発生を防ぐため、適切に薬剤防除を行う。また、降雨が多い場合は追加防除を行う。特に無袋栽培では黒星病の発生に注意し、薬剤防除を徹底する。発病果は伝染源となるため見つけ次第除去し、土中に埋める等して適切に処分する。
- ・曇雨天が続く場合の除袋は、通常より 2～3 日早めに行う。
- ・枝吊りや支柱の立て直しを行い、樹冠内部や樹冠下に十分日光が当たるようにする。
- ・着色期の品種では、徒長枝の切除や摘心、葉摘みを行う。樹冠下の明るさの目安は木漏れ日が約 20% 透過する程度とする。
- ・反射マルチは早めに敷き、反射率の高いものを使用する。
- ・熟期になった果実は、熟度を優先して硬度 2kg を下回らないうちに収穫する。
- ・モモせん孔細菌病対策として、病斑部 (葉、枝、果実) は見つけ次第除去し、園外へ持ち出す。

<スモモ>

- ・灰星病の発生を防ぐため、適切に薬剤散布を行う。雨が多い場合は追加防除を行う。発病果は伝染源となるため見つけ次第除去し、土中に埋める等して適切に処分する。
- ・支柱の立て直し、徒長枝の切除、摘心などの管理により、樹冠内部に十分日光が当たるようにする。特に結実量の少ない園では、新梢が過繁茂になりやすいので、新梢管理を徹底する。

(2) 野菜・花き・水稻

<露地野菜>

- ・圃場の過湿を防止するため、圃場周囲には排水路を整備する
- ・ナス、トマト、キュウリ等の果菜類では、疫病、べと病、灰色かび病などの病害が発生しやすくなるので、適切な薬剤散布による病害の発生防止と、り病株・り病葉

- ・り病果の早期除去に努める。
- ・葉根菜類では、べと病や軟腐病などの病害が発生しやすくなるので、適切な薬剤散布により、病害の発生防止に努める。
- ・長雨による肥料の流亡など、肥料切れによる樹勢の低下を防止するため、適切な追肥を行う。

<施設野菜>

- ・灰色かび病・疫病・斑点細菌病などの病害の発生を予防するため、施設内が過湿にならないように換気をするとともに薬剤による防除を徹底する。
- ・梅雨の晴れ間は急激に気温が上昇しやすいため、葉焼けやしおれなどに注意し、日中のハウス内温度を25～28℃程度を目標に管理する。

<花き>

- ・疫病、灰色かび病などの病害が発生しやすくなるので、病株の早期除去と適切な薬剤散布により、病害の発生防止に努める。
- ・鉢間隔を広げたり、追肥等の適正な施肥管理に努め、草勢の維持と促進を図る。
- ・日中のハウス内温度上昇と多湿による影響で灰色かび病等が発生しやすいため、通風や換気を図るとともに、かん水量を控えるようにする。
- ・洋らん類では、曇天時には遮光を控え日射量の確保に努める。また、曇天後の晴天による急激な日射量の増大による日焼けが懸念されるため日射量の調節に努める。

<水稲>

- ・気温25℃前後で湿度が高いといもち病の発生が増加する。本年は5月下旬以降、曇雨天が多く、いもち病の発生が早まる可能性があるため、発生状況に注意して対策に努める。
- ・補植用の置き苗は、いもち病の伝染源になることが多いので、不要になった置き苗は速やかに処分を行う。
- ・冷水灌漑がい田、日照不足田、窒素過多田などでは、いもち病の予防散布を行う。
- ・いもち病の早期発見に努め、発生がみられる水田では、直ちに薬剤散布を行う。

(3) 畜産

- ・飼料作物については、排水不良が懸念されるほ場では、湿害対策のため排水の確保に努める。
- ・降雨により畜舎内の湿度が上昇する場合は、換気や通風を適時実施するなど、畜舎内環境の改善を図り、疾病発生予防及び家畜のストレス低減に努める。
- ・雨水等によって変質した飼料は廃棄し、飼料タンク内の点検や飼料庫の通風を促す。